〝啄木のふるさと〟『もりおかの短歌（うた）』第十五回年間最優秀賞決定！

啄木のふるさと『もりおかの短歌』事業は、啄木が生まれ育った盛岡を訪れる観光客や市民による、啄木短歌の特徴である『三行書き』の短歌づくりを通じて『短歌のまち　もりおか』を推進することを目的に平成二十年より実施している事業です。
四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分けて募集し、一年間に応募のあった三七二首（一般部門）の中から第十五回目となる年間優秀作品が決定いたしました。
今回も多くのご投稿をいただきありがとうございました。誌面を通じてお礼申し上げます。

年間最優秀賞（一首）

この街は何か良い事有りさうな
開運橋（かいうんばし）とふ
橋（はし）を渡（わた）りぬ

盛岡市　佐藤　忠行

【受賞者からのコメント】
ゆったりと流れる母なる大河北上川の清流手入れの行き届いた土手岸の花壇の四季の花々、流れの先に父親の如く悠然と聳える岩手山、盛岡の表玄関ともいえる開運橋からの眺望は渡る人々に、安らぎと幸せ、希望を与えてくれ、盛岡のパワースポットです。

【審査員講評】
（山本豊）多くの人の感じる気持を単刀直入に表現した歌である。開運橋という名前は、誰にでも何か良いことがありそうな感じを与えてくれる。その橋を渡りながら、遠くに見える岩手山や橋の下を流れる北上川は心を和ませる。
（赤澤）開運橋を詠んでいる。名前の由来は解からないが、作者は良い名前だと思ったのだろう。渡れば何か良いことがある気がしたのか。開運橋は二度泣き橋の別名を持つ。これを素材にしても作れそうだ。新たに挑戦してほしい。
（山本玲子）開運橋という名の橋は盛岡を合わせて北海道・東北を中心に6つあるそうだ。何か良いことがあってほしいという北国の人々の願いが込められている。盛岡駅を出て開運橋を渡った旅人の期待が古の人々の思いと重なる。
（吉田）盛岡駅に降り立ち正面の道路をまっすぐ進むと大きな橋があります。その橋の名は「開運橋」。旅人でもそこに住む者でも開運橋を渡る時の楽しい気分、ほのかな期待をリズムよく表しました。愛唱歌になる歌ですね。

年間優秀賞（二首）

啄木（たくぼく）の新婚（しんこん）の家君（いえきみ）と吾（あ）の
靴（くつ）をぴたりと
寄（よ）せて揃（そろ）へき

奥州市　遠藤　カオル

【受賞者からのコメント】
若き日に君と「啄木新婚の家」を訪れた際、玄関で二人の靴をぴたりと寄せて揃えたときのことを短歌に詠みました。あのときの勇気、嬉しさと恥ずかしさ、一途な思いが蘇り、幸せな気持ちになります。また訪れたいですね。

【審査員講評】
（山本豊）啄木の新婚の家を訪れた若き日の思い出を詠い、情の深い歌である。靴をぴたりと寄せて揃えたと表現し、共に訪れた相手への思いの強さを感じさせる。具体的事実のみを述べたことにより、感情の甘さを押さえている。
（赤澤）啄木の新婚の家を素材に上手く詠んでいる。夫婦で訪ねたのであろう。靴を素材にした着眼が良い。「ぴたり」が効いている。短歌の詩形を活かし巧みに詠んでいる。作者の感性の鋭さに驚き、気持ちの優しさに心惹かれた。
（山本玲子）「ぴたりと寄せて」という言葉にやられた。まるで啄木の新婚時代の初々しさをつれてきたように感じるのは私だけではないはず。「君と吾」という表現もいい。仲睦まじく二人腕組みをしている様子まで映しているようだ。
（吉田）作者は石川啄木と節子との短い新婚生活を知っていたのでしょう。自分と夫の靴を「ぴたりと」寄せて揃え、二人の生涯に思いを馳せ、自分たちの夫婦生活の平穏を祈ったのでしょうか。初々しくも情感のこもった歌です。

ふるさとの
鬼（おに）の手形（てがた）を取（と）り囲（かこ）み
眺（なが）める子（こ）らは瞳（ひとみ）をこらす

盛岡市　赤坂　昌信

【受賞者からのコメント】
三ツ石神社の鬼の手形の岩の周りに集まり手形が何処にあるか探す子供達の表情を詠みました。岩手の語源になったともいわれる説明を聞き興味津々の子供達が可愛い。選んでいただきありがとうございました。

【審査員講評】
（山本豊）盛岡市の三ツ石神社には、鬼が手形を押したという伝説のある三つの大きな岩がある。岩を取り囲み手形を見つけようと瞳をこらす子供達の情景には、ほのぼのとした優しさが感じられる。私は手形を見つけられなかった。
（赤澤）三ツ石神社の鬼の手形を素材にして、子らを見つめる作者の気持ちが優しい。この神社は私の家に近く子どもの頃によく遊んだ。私たちも鬼の手形があるものと思っていた。子らの興味は時代を経ても変わらないと知った。
（山本玲子）大人たちは「岩手」の起源として思い浮かべるのだが、子供たちの感性はもっと鋭い。鬼の姿かたちを想像し、どれほどの力でこの岩に手形を残したのか、と目の前に広がる世界に興奮しているのだ。
（吉田）三ツ石神社にある巨石には鬼の手形が残っているそうです。保育園児でしょうか。「見えないよ」「どこ？」「あったあった」などと賑やかに話しているようすが浮かびます。そんな子供たちに未来への希望を感じる作者です。

年間奨励賞（三首）

城跡（しろあと）に銀杏（いちょう）の黄葉（もみじ）
散（ち）りしとき歌碑（かひ）に触（さわ）りて
軽（かる）く音（おと）立（た）つ

奥州市　遠藤　カオル

【受賞者からのコメント】
友人と城跡を散策していたときに、こつんこつんと音がするので、何の音かなと辺りを見回すと、扇形の銀杏の黄葉が次次と散り、その柄が歌碑に触れるときの音でした。時季になりましたら、また体験したいと思います。

【審査員講評】
（山本豊）岩手公園には、石川啄木の有名な歌「不来方のお城の草に寝ころびて」の歌碑がある。銀杏の黄葉が散りながら歌碑に触れた時、かすかな音がするという把握には情感があり詩情がある。瞬間を捉えて歌に深みが加わった。
（赤澤）この歌はまさに短歌という感じがする。作者の観察は細部まで行き届いている。しかし、それは説明ではない。感性が詠ませたのだろう。このような歌を作る作者は羨ましい限りだ。さらに感覚を研ぎ澄ましてほしいと思う。
（山本玲子）もちろんこの歌碑は啄木の「空に吸われし十五の心」だろう。歌碑とともに季節が巡ってゆく。これからも世代を超えて歌碑は力強く訴えるに違いない。啄木も季節の音とともに自然の営みの中で楽しんでいるに違いない。
（吉田）岩手公園の「不来方の」の啄木歌碑のことでしょう。作者は城跡を訪れ歌碑の前に佇んでいます。銀杏の葉が散って歌碑に触れる音を作者の耳は聞き留めます。繊細で丁寧な詠み方に秋の公園の寂しさが伝わってきます。

雪積（ゆきつも）る枝（えだ）に
小（ちい）さき蕾（つぼみ）もつ
石割桜（いしわりざくら）よ春（はる）にまた見（み）ん

千葉県浦安市　岩田　一

【受賞者からのコメント】
昨年夏盛岡を訪れ『啄木新婚の家』でこの催しを知り応募する様になりました。その後秋冬春と再訪し盛岡の街を堪能しています。街並が明治昭和の面影を残す建物が多く道の広さや街路樹と共に心を落ち着かせてくれます。

【審査員講評】
（山本豊）雪の積った石割桜の枝の小さな蕾が花を咲かせる頃にまた見に来たいと詠って、読む者に明日への希望をいだかせてくれる歌である。人間が花や木を愛でるのは何に因るのかということが静かに伝わってくる。
（赤澤）作者は旅の途中で冬の石割桜を観た。そして蕾に心が動いたのだ。詩の感性を持った作者である。花の時期に石割桜と再会できたのだろうか。歌に詠まれたものの時間は止まる。さらに歌に磨きを掛け精進してほしいと思う。
（山本玲子）石を割るほど力強いはずなのに、か弱い花を咲かせることにある種新鮮な驚きを感じる。「美しいもの」というのは弱さだけではない。強さを備えてこその本当の強さだ。作者はそこに注目したのだ。
（吉田）盛岡の春に先駆けて咲く石割桜ですが作者は冬に訪れたのでしょう。この雪を被った小さな蕾が春にいっせいに咲くのだと思うと愛しさもひとしお。優しい眼差しが印象的です。咲いた姿もご覧になったでしょうか。